

ネットワーク連絡会 会議要旨

日時：平成18年1月26日(木)午後6時～午後8時

会場：しんじゅく多文化共生プラザ 多目的スペース

参加者：31人

～開会挨拶～

区：本日は、ネットワーク連絡会にお集まりいただき誠にありがとうございます。
このネットワークに参加することで、個々の活動を広げ、お互いに補完しあうことができればよいと思っています。

～プラザ利用状況報告～

区：【配布資料をもとに利用状況の説明】

A：プラザの利用人数はどのようになっているのですか。

区：月平均で約1,000人の利用があり、そのうち4割は外国人の方の利用となっています。開設後約5ヶ月ですが、思ったよりも多くの方に利用されていると思います。今後もみなさんに口コミでも広めてもらい、ますます多くの方に利用していただきたいと思っています。

～ネットワークと区・財団との連携～

区：新宿区としてできることは、第一に多文化共生プラザを大いに活用してもらうことです。リソースコーナーの日本語学習教材を利用するなど団体の活動等に役立てて欲しいと思っています。第二にネットワーク構築のためのサポートをします。ネットワーク全体で関わっていく活動の紹介、ポスター・チラシ、ホームページなどを作成するための予算を要求しています。第三に連絡会の呼びかけ等を行います。今回は初回ということで区が連絡会の開催を企画しましたが、今後参加している方々が連絡会を開催したいという場合にも区が通知を送るなどのサポートをすることができます。ただし、補助金などの金銭的な援助は考えていません。

区 : ネットワークでは区も参加者の一員です。

～各団体からネットワークに期待するもの～

B : まず参加者がどのような活動をしている団体の人なのかわからないと、ネットワークは始まらない。まずお互いを知ることが必要で、それから各団体がどう連携できるのか。

区 : ネットワークを進めながらお互いの理解を深めていきたい。

学校で

C : 学校の場合、子ども以上に保護者の方に情報を徹底することが難しい状況です。日本語をまったく話せない保護者もいますので通知文等を翻訳してほしいのですが、現状では数に限りがあります。適宜に翻訳してもらえるようなかたちになるのが理想です。

また、外国籍の子どもたちは言語能力のハンディキャップから進学が困難な場合もあります。日本語がわからない子どもを対象とした塾はなく、家庭教師を頼む家もあるが、全ての家庭ができるわけではありません。日本語がわからない子どもたちのための塾があればいいと思います。

両親が共働きで朝も夜も親が家にいない家庭が多く、子どもの行き場がありません。子ども同士でお互いの家を行き来したり、夜コンビニ等へ行ったりすることがあります。このような問題に対して生活基盤を整えるにはどうしたらよいか。また、それらを整えるためにどのような方策が適切なのかも検討しなければなりません。

区 : さまざまな分野の課題を出して検討していくような組織づくり、役割分担も必要になると思います。

D : 現在、私たちが実施している日本語教室は社会人が対象となっている。小中学校とすり合わせて、子どもたちを対象としたクラスのスケジュールも組みたいと思います。

地域で

E : 大久保という外国人の人口比率が約50%のなかで生活している。最近ゴミの問題は大分良くなったが、建築など事業者に条例・法令の理解が進むようにしてもらいたい。日本人も外国人も生活ルールを守って生活することが必要です。

F : さまざまな提案に対して人的な協力はどこまで出来るかわからないが、お手伝いできることはしたい。外国人に対する周知に関しては商店街を利用するのは効果的だと感じている。別の商店主の意識づけにもつながる。

G : 地域と乖離した場所で交流が行われている。プラザのように自分たちの住む地域の近くに集い、地域に持ち帰れるような仕組みづくりが必要だと思う。

H : 日本人と外国人の会話でニュアンスの違いによってトラブルになることはあるのか。

: 外国人の子どもたちの特徴として、言葉がとげとげしく表現がストレートということがある。友達同士の会話で乱暴な日本語を覚えてしまう。また、両親と過ごす時間が少ないなど、家庭で注意する人がいないことも原因のひとつではないか。

中学生になると日本語適応指導がない学校があるので、小学生のうちに日本語の勉強をしっかりとさせることが必要だと思う。

～ ネットワークで取り組む事業等の提案～

J : 多文化共生という施策は素晴らしいと感じているが、「多文化共生」という言葉は柔らかく言い過ぎていて解決困難な課題が多いという実態を隠してしまっている気もする。

日本人にとっては、外国人が増加することはうれしいと思うより、正直大変と思うことが多いだろう。1960年代から日本の都市化が進んだが、ムラ社会の良さも残っている。だから隣に住む人のことを知らないと不安に思うし、ましてや隣に外国人が住んでいて言葉も通じないとなおさら不安に思うのではないか。

外国人にとっては、歴史的な背景を背負ったまま日本に来ている。しかし、国と国との問題と個と個の問題は区別しなくてはならない。現実として、外国人というだけで“悪い”ことになる場合があり、その時は不快に思う。しかし、自分の意思で日本に来ているのだから、日本の文化・習慣を尊重しなければいけない。

周知については、チラシ・ポスターのような方法も大切だが、外国人にとっては口コミが一番効果がある。特に同じ出身国の仲間からの情報には耳を傾ける。

今回提案したいのがイベントを開催するという事。詳細はネットワークで協議のうえ決定することになるが、外国人住民に住民意識を根差す機会になるのではないか。

【配布資料をもとにイベントの企画を説明】

- G : イベント等の事業は一時的なものである。それよりも生活講座、日本語教室を大事にするほうが良いのではないか。
- F : イベントを開催するにはもっとネットワークに参加するメンバーの考えがわかってからのほうがいい。また、地域の課題の掘り起こしを先に行なったほうがいいのではないか。メンバーで共通認識を持ってからイベントにつなげていければいいと思う。
- K : 現実的に外国人のためのネットワークにしていきたい。まず先に何を課題にするか、その掘り起こしをしたほうがいい。ネットワークの半分程度を外国人に占めてもらいたいと思う。
- D : 何を目的としたネットワークとするのか。共通認識・理念を話し合うべき。外国人に参加してもらうのは不可欠である。
- J : 実際に動くことでわかることもある。5月にイベントを開催することが早いと思う方もいると思うが、団体の活動に支障がでるようなことはないのではないか。
- L : 楽しくないと人が集まらない。会議も必要だが実際に接点を持つことで課題が見えてくることもある。イベントと議論、どちらが先がいいのが正直わからないが。
- H : 多文化防災訓練の時に起震車や消火器が外国人に好評だった。それは遊び感覚がもてる部分もあるからだろう。外国人の参加を促すには“楽しい”ことも必要。ただし、イベントを開催する時は区の他の事業と重ならないように事前にスケジュール調整をしてほしい。
- 区 : イベントが先か課題抽出が先か、またネットワークでどのようなことをしていくのがよいか、次回までに意見を持ち寄っていただき、検討しましょう。